

## 日本語教育でのコンピューター利用について ④

## 学習理論や教授法

前章で天理大学の CALL 教室のことを紹介したが、使い方としては従来の LL 教室の流れを受け継いでいるように感じた。なぜそのように感じたかを具体的に話す前に学習理論や教授法について少し考えてみたい。

日本語教育も含め、一般的に語学教育では学習理論をもとにいくつかの教授法を用い、授業を行っている。オーディオリンガル法は主に文の構造を意識し、新出の名詞や助詞を習い、動詞や形容詞の活用の訓練をし、それらを繰り返し練習し、習慣形成していくやり方である。従来こうしたことは LL 教室が活用されてきた。CALL システムも同じようにモデル文を聞かせたり、シャドーイングをしたり、聞く、話すという面で訓練することができる。つまり語学の基礎的な部分で繰り返し、訓練をさせるような場面で有効的に活用できるということである。筆者は今まで、教師主導で新出の語彙と文型を積み上げるように教えて行くオーディオリンガル法で教えながら、学習者が主体的に活動していくコミュニケーションアプローチの手法も取り入れながら、授業を組み立てていくという手法を取ってきた。オーディオリンガル法のやり方だけでは不十分でコミュニケーション活動も取り入れて、インプットもしながらアウトプットもするということが大事だと考えている。しかも教師の指示によりアウトプットするのではなく、自発的に考え、自分の言葉で話す、書くなどの活動を行っていくことが、コミュニケーション力の向上につながると考えている。言い換えれば語学教育の中で「正確さ」を訓練する部分と「流暢さ」を訓練する部分があり、その「正確さ」を訓練する部分で従来の LL システムや現在の CALL システムが有効的に活用できるということである。もちろん「流暢さ」を訓練する部分で活用することも可能で、CALL 教室は教師の使い次第で無限な可能性を秘めているといえる。

## 協同学習でのパソコン利用

天理大学の CALL 教室で初めて説明を聞いて、LL 教室の流れを受け継いでいると感じた理由は、筆者が天理教語学院で行っていたコンピューターの語学教育への利用は CSCL (Computer Supported Collaborative Learning) というコンピューターに支援された協同学習であり、プロジェクトワークなどの学習者が協同で学習していく上でコンピューターを介在させて効果的に学んでいくというものだったからである。2000 年頃「CaLabo EX」「ムービーテレコ」などの CALL システムもまだ開発されている頃ではなく、学習活動のどの部分にコンピューターを介在させていくことが効果的なのか考えて、現実的にできることから試行錯誤を繰り返していたように思う。そんな経験があるので、初めて CALL 教室に入り説明を受け、一通り機器の説明を受けた時の印象は LL 教室の流れを受け継いでいるのだと感じたのかもしれない。2000 年頃、パソコンが普及し、インターネットも ADSL の導入でブロードバンド時代が始まり、教育にもどんどん利用しようという気運が高まりつつあったように記憶している。筆者もその頃にはパソコンが仕事にも趣味にも手放せないものになっていたが、日本語教育にどのように活用できるのか模索を続けていた。しかし自分のやっていることが正

しいのか、本当に効果があるのかなど、あまり前例がないことで、とにかく試行錯誤を繰り返すしかなかった。

## ブロードバンド時代

2001 年にソフトバンク社が「Yahoo! BB」という ADSL のブロードバンド回線サービスを始め、一般にも常時接続のインターネット回線がどんどん普及した。日本語教師が個人でホームページを立ち上げるなど、情報発信する人も本格的に増えてきた。筆者もホームページを作り、情報を集めるだけでなく、自らも発信するようになった。個々の日本語教師がインターネットを介して、時間や場所を気にせず、繋がり合えるようになったと言える。現在の SNS が盛んで、ブログのように手軽にすぐ始められるという時代ではなく、ホームページ作成ソフトなどで、一からページを作っていかなければならなかったが、html の知識を学んでいくことは楽しくもあった。2002 年に『月刊日本語』のアルク社から電話があり、2003 年 1 月号で「日本語教育に IT 時代がやってきた!」の特集をやるので取材したいとのことだった。編集部の方が来られ、実際にコンピュータールームを見てもらったり、取材を受けたり、実践していることを伝えた。後に発刊されてから、他の取材を受けた日本語教育機関ではどのように活用されているのか知ることができ、とてもありがたかった。やはり自分と同じように試行錯誤しているのだと安心した面もあった。

## 日本語教師塾

2019 年 8 月時点では「IT (Information Technology)」という言葉も使われなくなり、代わりに「ICT (Information and Communication Technology)」という言葉がよく使われるようになった。言葉は変わっても意味するところは同じである。筆者自身は ICT というものは結局、人と人を繋ぐものであり、それを日常生活、社会生活、教育などの様々な面で活用していけば生活がさらに豊かなものになるものだと思っている。2001 年頃から始めた自分のホームページ「仮想日本語教育研究室」の中に日本語教師同士が交流する掲示板「日本語教師塾」を設置したのだが、日本語教師歴が長いベテランから初心者まで、いろいろな人が自由に書き込んで意見交換ができた。助詞の使い方の質問もあれば、テンスやアスペクトについての文法的なこと、また教室運営についてなど、個人的に授業で悩んでいることなどにアドバイスをしたり、受けたり、様々なことを話し合うことができた。日本語教師というものは、一般的に所属する教育機関で先輩の先生から教えられたやり方を習い、それが正しいと信じて、その通りに実践していくことも多いと思うが、ICT を利用することで他の教育機関の先生とも立場を気にせず意見交換することもできる。すでに当たり前のこととなっている感もあるが、当時は画期的だった。筆者も多くのことを学んだ。これはヴィゴツキーの唱える社会的構成主義の学習理論を教師同士が ICT を利用し実践していることであり、そういった環境づくりをするのに ICT は大きな可能性を持っていると言える。人と人が繋がることによって化学反応が起き、新しい発想が生まれ、新しいアプローチをすることができるのだと思う。